

# Café des open

## 三浦一族

### Menu 第16回

## 鎌倉時代の大地震と 三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

今年、関東大震災から100年を迎える節目の年です。そこで、今回は鎌倉時代に起きた大地震を取り上げ、三浦一族との関わりについて見ていきます。『吾妻鏡』には、鎌倉時代に起きた様々な自然災害に関する記述が数多く残されていますが、地震についても詳しく記されています。

嘉禄3年（1227）3月7日夜8時頃、鎌倉で大地震が発生し、各所で門扉や築地（ついじ／土で造った垣根）が倒壊し、地割れが生じました。『吾妻鏡』には、古老の言葉を基に、近年これほどの大地震の発生はなく、建暦3年（1213）5月に和田義盛が乱を起こした時以来のことと記されています。和田合戦が起きたのは、同年5月2日から3日にかけてのことでしたが、その終結後の同月21日に大地震が発生しました。その日の昼頃に発生した地震により、家屋は音をたてて倒壊し、山崩れが起き、地割れも生じたとされます。その後、仁治2年（1241）2月7日にも大地震が起きますが、この際も『吾妻鏡』は再び建暦年中の大地震を引き合いにし、古老の言葉を引用する形で、それは和田義盛の反逆の前兆であったと記しています。実際には、建暦3年5月の地震は和田合戦よりも後に起きており、必ずしも前兆というものではありませんでしたが、和田合戦は凶兆とされ、地震と結びつけられて意識されていたことがわかります。逆にいえば、鎌倉幕府最大の内紛で鎌倉を戦場とした和田合戦は、何度も引き合いに出されるほど、当時の人々に大変強い印象を与えた兵乱であったともいえます。

一方、地震は建物の倒壊だけでなく、津波が発生した場合には、さらなる被害をもたらします。『吾妻鏡』には、仁治2年4月3日夜8時頃、大地震の発生とともに津波が生じ、その影響で由比若宮の拝殿が流出したほか、着岸していた船10余艘も破損したことが記されています。この地震は、先述の仁治2年2月の地震からわずか2か月程後のことで、度重なる地震により動揺した人々も少なくなかったものと想像されます。

その後、正嘉元年（1257）8月にも、鎌倉では大地震が発生し、神社仏閣は悉く被害を受け、山崩れや民家の倒壊、築地の破損も相次ぎました。また、あちこちで、地割れが生じるとともに水が噴き出し、中下馬橋（なかのげばはし／現在の二の鳥居付近）付近では割れた地面から青い炎が燃え出したとの記述が残されています。

こうした大地震に加え、鎌倉時代は台風や豪雨による風水害、落雷の被害など、地震以外の自然災害も相次ぎました。こうした天変地異を鎮めるため、幕府は奉行らを通じ、僧侶や陰陽師らに祈祷を命じました。ただし、当時は陰陽師の判断で、災害を吉兆とみなすケースもありました。これは、現代に生きる私達にはなかなか理解できない感覚ですが、そのように判断された場合には祈祷が行われることはありませんでした。実際に祈祷が行われたケースでは、三浦一族がこれに関わっていたことを示す記述も残されています。例えば、建保3年（1215）12月30日、相次ぐ天変への祈祷が御所の南庭で行われ、三浦義村がその沙汰を行いました。また、義村は先述の嘉禄3年3月の大地震などの際にも、陰陽道の祭祀である天地災変祭（てんちさいへんさい）の沙汰を行っていました。その他、義村の孫にあたる佐原盛時も、貞永元年（1232）閏9月、天変による変気の祈祷が行われた際、その雑掌役（ざっしょうやく）をつとめました。

以上、鎌倉時代の地震を中心にその被害や三浦一族との関わりなどを見てきましたが、神奈川県内には鎌倉時代と関東大震災とを結びつける遺跡も残されています。大正12年（1923）の関東大震災とその余震後、茅ヶ崎では水田から鎌倉時代に架けられたとみられる橋杭が出現しました。この橋は、建久9年（1198）、鎌倉幕府の御家人稲毛重成（いなげしげなり）が亡き妻のために架けたものと考証されており、現在は「旧相模川橋脚」として国指定史跡となっています。



旧相模川橋脚（茅ヶ崎市）

参考文献：『茅ヶ崎市史5概説編』（茅ヶ崎市、1982年）、『新横須賀市史 資料編 古代・中世Ⅰ』（横須賀市、2004年）、高橋慎一郎『中世鎌倉のまちづくり 災害・交通・境界』（吉川弘文館、2019年）